

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(3 年計画の 2 年目)

1. 研究課題

チベット・ヒマラヤ文明の史的展開の学際的研究

Interdisciplinary Studies on the Historical Development of the Tibeto-Himalayan Civilization

2. 研究代表者氏名

岩尾 一史

IWAO Kazushi

3. 研究期間

2015 年 4 月 - 2018 年 3 月 (2 年度目)

4. 研究目的

チベット・ヒマラヤ地域と周辺諸文明との間における歴史的交流を通じて伝播したと考えられる社会システム・宗教・儀礼・言語などの交流史の諸相に関する研究成果を本共同研究班で学際的に集積し、それによってチベット・ヒマラヤ地域の文明の史的展開を多角的に分析し、ユーラシア世界におけるその位置づけの再評価を行なう。7世紀以降、チベット・ヒマラヤ地域は周囲の先行文明の影響を受けつつ、独自の文明を展開させてきた。11～12世紀に仏教を完全に消化して以降、より強固となったチベット文明は周辺文化と交流を繰り返しつつモンゴル～東アジアにその影響力を伸張させた。さらに20世紀半ば以降もその発信力は欧米社会までにも影響を与えている。このような発信力と柔軟性をチベット文明は如何に獲得したのか、また周辺諸文明とどのように相克・調和してきたのか。その具体像を探るべく、多様な視点からチベットと他文明との相互接触の諸相を学際的に分析する。

5. 本年度の研究実施状況

●[研究会と研究報告]: 本年度は合計で9回の研究会を行うことができた。班員それぞれの研究関心に沿った研究報告を依頼し、歴史学、文化人類学、言語学の各分野から、古代～現在にいたるまでのチベット文化の諸相について最先端の研究報告を聞くことができた。本年度の特徴として報告者の半数が関西以外の研究者によるものであり、国内における研究者の交流を促進することにも成功したといえる。また議論の時間を出来るだけ多く取ったことにより、異分野からの情報提供・意見交換をより活発に行うことにも成功した。各回の具体的な内容は以下の実施内容を参照されたい。

●[成果報告の打ち合わせ]:本研究班の成果報告をどのように公開し出版すべきかについて、研究会上において打ち合わせを複数回行った。

●[シンポジウムを開催]:9月17日(土)に東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて「チベット文明のレジリエンス」と題し、公開型シンポジウムを開催した。

7. 本年度の研究実施内容

2016-04-24

ブータンの諸言語と言語調査

発表者 池田 巧

2016-05-21

18世紀～19世紀の清・チベット・ネパール関係

発表者 小松原ゆり 明治大学・非常勤

2016-06-11

タワンのモンパ社会における竜神信仰と文化復興 —シェルヌツプ村の事例を中心に—

発表者 長岡 慶 アジア・アフリカ地域研究研究科博士課程

東ブータンのシャルチョツパ社会におけるアマ・ジョモ信仰

発表者 渡邊美穂子 同志社大学グローバルスタディーズ研究科博士課程

2016-07-09

辛亥革命前後, ダライラマ 13世の対日本外交

発表者 小林亮介 京都府立大学

2016-09-16

古代チベットにおける牧民の管理と土地

発表者 岩尾一史 神戸市外国語大学・非常勤

2016-09-17

チベット文明のレジリエンス

チベット史の転換期としての仏教伝播

発表者 井内真帆 神戸市外国語大学・非常勤

ガンデンポタンの成立と周辺諸国への波及

発表者 小松原ゆり 明治大学・非常勤

ポスト王政期ネパールにおける“仏教の政治”とチベット仏教の社会進出

発表者 別所裕介 広島大学

チベット古典文学の再創造

発表者 根本裕史 広島大学

ボン教のレジリエンス:人・自然・思想のつながりから

発表者 小西賢吾 金沢星稜大学

2016-10-15

内秘書院モンゴル文檔案にみる17世紀アムド東部のゲルク派諸寺院と清朝

発表者 池尻陽子 学振特別研究員 RPD(京都大学)

2016-11-26

ドゥク派開祖ツァンパ・ギャレー(1161-1211)の伝記研究:ブータン仏教とそのルーツ

発表者 熊谷誠慈 ころの未来研究センター

2016-12-17

アムド、バルティ、その他のチベット語

発表者 海老原志穂 東京外国語大学・非常勤

2017-03-18

漢語・チベット語バイリンガル史料からみた明代東アジアの異言語・異文化接触:正統13年(1448)「重修涼州広善寺碑」の検討を中心に

発表者 伴真一郎 大谷大学・非常勤

中世チベット史研究に関する新出文献とカダム仏教史文献

発表者 井内真帆 神戸市外国語大学・非常勤

8. 共同研究会に関連した公表実績

公開シンポジウム「チベットのレジリエンス」(9月17日於東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所):AA研共同利用・共同研究課題「“人間一家畜一環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」, 科学研究費(基盤B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者:星泉(AA研所員), 課題番号:15H03203)との共催。

10. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数	参加人数				延べ人数			
		総計	外国人	大学院生	若手研究者	総計	外国人	大学院生	若手研究者
所内	1	3 (0)	0	0	0	15 (0)	0	0	0
学内	3	4 (1)	1 (0)	0	0	18 (8)	0	2 (2)	0
国立大学	5	7 (3)	0	0	0	30 (9)	0	1 (0)	0
公立大学	2	5 (2)	0	0	0	20 (6)	0	0	0
私立大学	8	8 (1)	0	0	0	34 (9)	0	3 (3)	0
大学共同利用機関法人	0	1	0	0	0	1	0	0	0
独立行政法人等公的研究機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
民間機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
外国機関	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	19	27 (7)	1 (0)	0	0	118 (32)	0	6 (5)	0

※()内には、女性数を記載

11. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

参加研究者がファーストオーサーであるものを対象

総論文数	38(0)
国際学術誌に掲載された論文数	2(0)

※()内には、拠点外の研究者による成果(内数)を記載

13. 次年度の研究実施計画

- 次年度は、本年度に引き続き研究会を開催する(合計 8 回程度)。本年度と同じく研究報告を行う形式であるが、同時にコメンテーターを設置して、より専門的な議論が可能な形式に改変する。
- 班員以外にも広く研究報告の門戸を開き、年間のべ 2 人のゲストスピーカーによる研究発表・講演を企画している。また夏～秋の時期に研究シンポジウムを開催する予定である。規模は 2 日間、開催地は未定。合計して年間のべ 15 人程度の報告者を招聘する予定である。
- 研究成果の公開促進をはかるために専用のホームページを開設し、途中成果の報告を随時行う予定。
- 研究班活動の拡充をはかるため、新たに所内外から班員を招聘する。現在のところ 5 人の研究者(歴史学、仏教学、文化人類学)に研究班参加を呼びかける予定である。これにより学際的な議論の活発化と情報交換のさらなる促進をはかる。

15. 研究成果公表計画および今後の展開等

研究成果報告論集『チベット・ヒマラヤ文明の歴史的展開』を 2018 年度末に刊行予定。